



ノーベル賞から考えるジェンダー平等

～ 2023年受賞者たちの授賞理由～

10月に今年のノーベル賞の発表がありました。ノーベルの命日である12月10日にはスウェーデンで授賞式が行われます。今年の実賞者からはジェンダー平等に関連した授賞理由が多くみられました。

ノーベル経済学賞

クラウティア・ゴールティン氏

アメリカのハーバード大学教授。専門は経済史、労働経済。
男女間の賃金格差を分析した研究が評価され、受賞しました。

格差が生じる理由について、それまでは経済発展が女性の就業率の向上をもたらすと考えられてきましたが、ゴールティン教授は各種統計等のデータを用いて、工業化の過程で家事・育児負担を負わされる女性が時間的制約を受けて活躍できない状況を明らかにしました。

日本の労働市場についても、日本社会が女性の働き方の変化に追いついておらず、真の意味での社会参画はできていないと指摘しています。

ノーベル平和賞

ナルゲス・モハンマディ氏

イラン出身。人権活動家。NGO「人権擁護センター」副代表。

長年、イスラム体制下のイランで、女性の人権侵害を告発し、死刑に反対し続けてきました。これまで、13回の拘束・5回の有罪判決を受けていて、現在も刑務所に服役中ですが、ひるむことなく声をあげ続けています。

イランでは表現や言論の自由が制限され、女性には公共の場でのヘジャブ（スカーフ）の着用が義務付けられています。

モハンマディさんは、「私の活動が世界的に認められたことで、より希望が持てるようになった。勝利は近い。」とコメントしています。



リクエストにつき、世界編をお送りします！



今月知っておきたい言葉

ジェンダー平等の扉を開いた偉人紹介

Vol.13

ジェンダー平等に尽力した世界の偉人をご紹介します

マリ・キュリー (1867~1934)

科学者。通称 キュリー夫人。ポーランド生まれ。

ロシアの支配下にあった時代で困窮しており、また女性が教育を受けることが難しい環境だったが、懸命に研究を続けて科学者となった。物理学者の夫とともに、共同でポロニウムとラジウムを発見し、ノーベル物理学賞を受賞。その後、マリはノーベル化学賞も受賞しており、女性で、なおかつ2度もの初めての受賞者となった。

年収の壁

働き損にならないようにパート従業員等が、「103万円」「106万円」「130万円」等を基準として就労調整をすること。

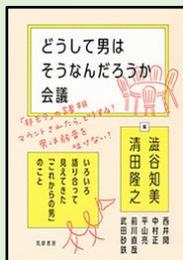
企業からの配偶者手当が支給されなくなったり、所得税や社会保険料が発生したり、金額により生じる壁は様々だが、総じて手取りが減ることになる。政府が10月より、これらの壁への対策を進めている。



新着図書のご紹介



パレア松本には図書コーナーがあります。どなたでも自由に本を読んだり、借りたりすることができます。



『どうして男はそうなんだろうか会議』

(澁谷 知美・清田 隆之著、筑摩書房、2022年)

「男」っていったい何だろう。その素朴な問いに、各界の専門家を交えて、対談形式で迫る一冊。かなりきわどい内容を含みますが、一つの例として受け止めると世界が広がるかも。

『ポストイクメンの男性育児』 (平野 翔大著、中央公論新社、2023年)

筆者は、女性が行うことが想定されている現在の妊娠・出産・育児には、男性への「支援」という視点が欠けていると主張しています。「何もやってくれない夫(父親)」ではなく、「孤立する夫(父親)」増やさないためにどうすればよいのか。男性育休をジェンダーの視点からもとらえた良書です。



このニュースレターは、松本市公式ホームページでも見ることができます。

Facebook、X (旧 Twitter) もやっています！

松本市女性センター



<編集・発行>

松本市 人権共生課 (松本市女性センター)

〒390-0811

松本市中央 1-18-1 Mウイング3階

TEL 0263-39-1105 / FAX 0263-37-1153

✉ kyousei@city.matsumoto.lg.jp